



Cosmic rays

湯ノ浦ユウ



青い一本道  
長い一本道

風だけが吹いている

まだ、もう

終わりがたくない

遠回りして歩いていこう

姿勢だけはひたすらに

まっすぐ、まっすぐ

ゴツゴツした道

とばなくちやいけない道

風はもうそんなに感じない

まだ、もう

やれることをやればいいさ

近道を見つけ出していこう

姿勢はもう

なんだっていいんだ

「グレー」

自分の意見をただ振り回しているだけじゃないの？

それなら誰でもできるんじゃないの？

それがあなたのやりたいことなの？

あなたがただ気持ちいいだけじゃないの？

ねえ、そうでしょう？

薄暗くなった頃、  
外の気温も随分と冷え切っていた。

夕闇を切り裂くように、  
白い雪がグレーの空に溶け込んで、  
私は今日の美術の授業で完成させた、  
パレットの上の何とも言い難い色を思い出す。

あー、さむさむ……

ストーブのオレンジ色が恋しい。

なんならこたつでミカンも恋しい。

雪見大福は寒いからパスだ。

今日はあったかくして寝よう。

帰り道、

もう雪は積もり始めている。

道路も白に塗りつぶされていく。

明日の景色を想像して少しだけワクワクする。

あー、

やっぱり雪見大福食べよう。

滑って転ばないように気をつけながら、

私は小走りを敢行する。

私は寄り道をするため、

温かいであろうコンビニの扉に手をかけた――。

「時間の終わりの手前の気持ち」

通り過ぎていく、  
なんでもない毎日も時間も、  
憂鬱な思い出も大切な出来事も、  
一人だった時も二人でいた時もみんな一緒だった時も、  
退屈だった事も信じられないくらい楽しかった事も、  
全部一人の自分が体験したことで、  
思い返してみれば死ぬ程恥ずかしい事も、  
ずっと続いて欲しいことも、  
結局のところ、  
全部忘れられない。

「最後の放課後」

キーン、コーン、カーン、コーン

音楽室にチャイムの音が鳴り響く

日中のうちに綺麗にした音楽室は

いつもの少し埃っぽい匂いもあまりしない

高校生活最後の放課後が始まってしまふ

もう、ここで時間を繋ぎとめておくこともできない

本当はずっとここに

みんなと一緒にいたいけど

いられたらいいんだけど

そうもいかないんだよね

終わっちゃうけど

新しいことが待ってる

少し辛かったり

哀しかったりするけど

時間は続いていくし

気持ちだけそこにおいたままじゃ

ごんごん先に進めなくなっちゃうんじゃないかな

せつかなんだから

次も楽しまなくちゃ

でも

せつなかだから

ここでの思い出も

何かに残せたらいいんだけどなあ

もうすぐチャイムも鳴り終わる

間もなく最後の放課後が始まる

キーン、コーン、カーン、コーン

雲一つない空っぽの青空は

太陽だけが主役みたいで

なんだか勇ましい

でもギラギラとしている日差しは

まだ寒い冬の空気っていう見えない敵に

悪戦苦闘しているみたいに見えた

「音楽と電車と世界と私」

言葉の重みに耐えかねて

人類は義務のようにヘッドホンを着用

電車ですれ違う友人との会話もいつの間にか途切れ

冬の自転車通学は息も切れる

マフラーを揺らしながら切る風の音も音楽に遮られ

繋ぎ止めたい気持ちもふんわりとした微熱も消去

笑えない近未来的通学路

ここは透き通った未来の完成系

「銀河鉄道」

夜の静かな空気が肌に刺さり  
冷たい風は目の前の靄を晴らしていく

空にぼんやりと浮かび上がる

星が集まってできた島から

呼ぶ声が聞こえる

猫や兎の合唱と鈴の音が一緒にシャンシャンと鳴り響いて  
確かにその音は僕のところまで届いて聞こえるんだ

夢みたいな世界にいる僕は

空を飛んで切符売り場に向かう

『もう行くね、みんなバイバイ』、と

フィルターを通すことは  
切り取って見るといふこと  
一瞬とか瞬間とか  
景色とか人とか  
良いものも悪いものも  
自分の感覚と主観を信じて  
切り取る

好きなものも嫌いなものも  
フィルターによって誇張される  
そして自分ではない誰かが  
そのフィルターに重ね合わせようとする  
それを繰り返して  
人は人を好きにも嫌いにも  
簡単になれるんだ

ほつりとしていた私に当たるスポットライト

振り絞る声は遠くまで届くのかな

隣の世界にいる君に聞こえるように歌うから

解れる日々に消えてしまいきような存在を繋ぎ止めておくために

今日も誰かが私の世界に色を付けてくれる

命を食べられない私は

積み重ねた言葉と音で歌を紡いで生きている

音の世界に風が吹き抜ける中  
私は鮮やかな呼吸音を響かせて  
胸を焦がした

白黒の世界が永遠を感じさせる  
眠たい瞼をこすって

自分のリズムを見失わないようにした

点滅するスポットライトは  
ワン、ツー、スリー、で暗転

ドラマのような時間が  
滑り落ちるように消えていった  
儂くて尊いのは現在進行形

コンパスで描いた円の世界じゃ抑えきれなくて  
唐突に崩壊はやってくる

誰かのリズムが濁流みたいに流れてきて  
ワン、ツー、スリー、で漂流

輝いて見えるのは  
希望が堂々と歩く姿

ドキドキと音を立てる心臓  
頭の中はいつの間にかトリップ  
宇宙のパレットに星を流し込む

そうしたら宇宙旅行に出かけよう  
もう降頻る雪の柔らかい道にも慣れた  
何時だって自分ってという敵からの  
視線を避け続けてきた

息が切れる帰り道  
足跡は私の一つ  
未来への看板を発見

目的地はもうすぐそこだ  
もうすぐ宇宙への階段を登ることができる

そう思うと  
ドラマのようで息もつけない  
どこにも転がっていない私だけの一場面

「真っ白は純粹と無機質」

雪で白く染まった世界に  
ときめき模様を付けていく  
刷毛から滴る虹色の絵の具は革新の予感  
目の前に立ちはだかる雪の壁は  
無機質な白を失う

夢想

夜が光を失うように  
世界が雪で色を失うように  
年月が希望を失うように  
手練り寄せた先の答えに  
ふわりと避けられた僕は  
色を付けることをやめた

星、星

空の上には誰かが住んでて  
知らない生活が広がってる  
なんて妄想はごうだろうか

僕らの知らない何か  
僕らの知らない何処かで

今日も息を潜めて僕らを見てる  
何て想像を掻き立てられる

空にはいつも通り  
星、星

本当にいつも通りなのかな  
みんな気付かないのに誰かが気付くのかな

私は空が好き  
恋焦がれてる  
ずっと続く青も  
曇ったグレーの空も  
朝焼けのオレンジも  
夕焼けの赤色も  
夜の暗闇も  
みんなに片思い

空を飛んだり  
泳いだりしてみたい

でも

そうもいかなくて  
私は飛べるような人間じゃなかった  
非力で自分の殻を破れなかった  
なのに私は願ってしまった

自由を

飛びたいという欲を

私は自分の維持をすることしかできなかった  
ずっとそのまま

ここに居続けるように

精一杯

ここに居れるようにするしかなかった

そう

私は飛びたかったのに  
気が付いたら  
ごんごんとスピードを上げて  
風を切って

私は空に向かって落下しているだけだったんだ

廃墟となったビルが並んでいる  
ここはもう誰もいなくなってしまうた街  
いつの間にか誰も寄り付かなくなり  
時間が止まってしまつて  
流れに置いていかれてしまった街  
錆びた鉄の匂いが立ち込めている

### 殺風景

重苦しい空気に生温い風が重なる  
もう誰もいないはずの街  
私はここにいるんだ  
ずっと前から  
今も変わらずにね

だからみんなのこともよく知っている  
あなた達が知らなくても  
そんなの関係ないの  
だって私はここにいるんだもの

いつからか変わらなく漂う血の匂い  
人間が生きた証が刻まれた街  
今日も雑踏の幻想  
一度深く目をつむり  
一呼吸置くと幻想はいつも消えてくれる

また廃墟の間の細道を歩き始めると  
誰もいないはずのこの場所で誰かとすれ違った  
歩きながら横に目をやると  
向こうも同じようにして目が合う

そこにいるのは  
私だった

「動き出さない時間」

昔の知人から

「思い出を美化して

今の友達に伝えるのは

迷惑だからやめて」

と言われる夢を見た

ドキッとして目が覚めて

息が切れた

「守りたいもの」

自分の陳腐な世界なんて  
くしゃくしゃに丸めて

簡単に 捨てられちゃうから

みんな

くしゃくしゃに

ならないように

必死にそれを守るのよね  
それが go という行く先であっても

間違っても

辛くても

偽善であっても

嘘であっても

まだ何も分かってないから  
もがいている

同じ夢の中で同じ思いを持って  
いつか宇宙の塵になる  
涙はもう出てこない

透き通った光に照らされて  
僕らの影だけが勝手に鬼ごっこしてる  
人混みに紛れて  
いつのまにか未来とはぐれた

今日もカナシミ商店街には  
必死に誰かを探す子どもと  
何も気づかない大人の姿が見えるんだ

「ほんの少しの願い」

ロウソクの薄らとした光が心細さを救ってくれた  
涙も一頻り溢れ乾いた目  
真っ赤に泣きはらした目  
部屋の中はほっかりくつきり影が鬼ごっこしてる  
孤独をぶつけて痛みがじんわりと  
またやんわりと広がった  
もっとまっすぐな気持ちになれたら  
どこにだっていけるのに

光を見に行こう  
こんなロウソクの儂げな光じゃなくて  
こんな不安と恐怖をごちゃ混ぜにした闇の中なんかにはどこにもない  
もっと大きな光を

明日もし何事もなく太陽が昇ったなら朝日の光を見に行こう  
車でドライブなんかしながらさ  
海を横目に潮風を堪能しながら  
夜になったらゆっくり星の光を見よう  
なにも考えないで  
海の音に耳を傾けて  
空の広さに体を預けて

瞼の奥の光と闇を感じながら  
ほんの少しだけ日常を願って  
手を合わせて

誰かに  
何かに  
祈った

「充電される気持ち」

あなたには目が二つあるでしょう？  
何を見るためなんだろう？

片方で形を捉えて  
もう片方で形を疑うため

悲しみも憂いも確実に満タン決め込むために  
行列に並ぶ人たち  
そんな燃料入らないよ

知らない  
忘れた

何年か立って  
あの日の叫び声なんてどこにも響いてない  
何事もなかったみたいに

「優しくて、甘くて、溶けてしまえう」

瞼に焼き付いて離れてくれないあの光景も

心を焦がしたあの時間も

気持ちを熱くした経験も

いらないと燃やした知識だけの陳腐な言葉も

いつの間にかなくしたあの日の不安も

忘れてしまった刻んだ思い出も

都合の良い自分の歪んだ解釈も

全部、優しくて哀しいもの

壊れた世界で明日を信じる

今、私は列車の三両目あたり  
次の駅は月

乗客は賑わい会話も弾んでいる

何だか酷く取り残されたような気分

不安になって君の姿を探してみるけど

意味なんてなくて

ずっと続く迷路みたい

君も私を探してどこかでいたちごっこしてくれていたらなあ

なんて夢みたいなことを考えた

水飛沫が上がる音が遠くから聞こえるんだ

酷く曖昧に

それと同時に君の足音に似た音も聴こえたんだ

とにかく限られた手掛かりで君を探したんだ

でも見つからない

見つからない

垂らされた糸の先は嘘

私は孤独を誤魔化しきれない

失くした気持ちに分からなくなってしまった

色んなものを諦めて、絶望した私は列車を降りた

どこかで見たことのあるウサギの車掌さんが私に手を振る

元気でね♪、と

私も思わず、慌てて、一生懸命になって手を振り返す

バイバイ、私♪、と

列車は私を置いて終点の先に行ってしまった

私は少し休憩してから

次の列車で終点を越えようと思う

容赦ないくせに  
ぐるぐる、ぐるぐる  
知らないうちに  
ぐるぐる、ぐるぐる

回って、巡って  
見かけたときには  
もうずっと遠くに飛んでった

やりきれない気持ち染める  
黒とか青とか使って  
白くしようとする

どうにもならないことに気づいた  
気づいた時には  
もうずっと遠くに飛んでった

思い当たるんだ

あの日あんなことあったな、とか

誰も近くにいないから

すぐに気づくんだ

私の周りにはあなたしかいないから

きっと私の答えはひとつなの

忘れないんだ

どこにいたって関係ないの

いつの時代だって関係ないの

きつともうすぐ夏休み

きっとあなたの答えはひとつなの

夜の口を入れて三合目あたり  
街は浅い眠りの中で  
子どもたちの秘密の冒険が始まる時間

疎らに灯る光は隠れ家みたいな大人っぽさ  
静かでチクチクする空気がむずがゆくて  
走り出したくなる

街で一番大きな坂を  
鼻歌まじりで駆け下りる

通り過ぎる風景は  
私を名残惜しんで振り向いてはくれないけぞ  
風を切って流れていく街並みは爽快

夜の散策に  
私は最高潮に勇者気分だ

普段よく行く駅前のレストランさん  
飲めないコーヒーを注文して浸る私なりの大人な時間  
今日だけは何だかおいしく感じた

なんでだろ？  
なんでかな？

夜には秘密がいっぱい  
ナゾだらけ  
可笑しいね

不思議な感覚が生む笑顔は何とも気持ちが良いくて  
またワクワク、ドキドキ

これだから夜の冒険はやめられない  
そんなことを思いながら  
私は鼻歌まじりでまたどこかへ走り出した

今日は

雨

一日家で

雨宿り

窓ガラス一面に

満たされていく

水滴

その行き先を追いかける

ぶつかって無くなるもの

長い時間そこに有り続けるもの

沢山の雨粒が目の中の視界をいっぱいにして

私の一日もいつの間にか

流していつてしまった

しとしと、しとしと♪

ザー、ザー、ザー、ザー♪

雨の日って

まったり

ゆったり

ほっかり

くつきり

ゆっくり

じっくり

ぼーっとしていたい

「真つ逆さまガール」

晴れた日に雨傘をさしっぱなしで

雨の日は「ぬれない気分だ」なんて言って

傘をさそうともしない君が

あの日口ずさんでいた何ともいえない

微妙なメロディーの曲を

僕は忘れられずにいる

取りあえず、大学入って、取りあえず就職した。

「取りあえず」にここまで僕は置いてきぼりにされている。

ただここにいるだけで、ただここにあるだけ。

なんだか、よく、分かんない。

考えようとしたところで、そんなもん何だって。

すごく悩んでしまっただけからそこに行きつく。

明日突然――。

劇的に世界は変わったたりしない。

明日も、明後日も、そのまた次の日も。

何も変わらない。

明日突然職を失ったって、街が一つ無くなったって、世界が終わったって。

何も変わらない。

これだって取りあえず書いてみてるだけだし。

取りあえず世界も終わってみるだけだって。

またそのうち再結成だって、再活動だってあるかもしれない。

またいつの間にか世界が出来上がって始まって……。

そんなもん。

あれ、何だっけ？

あの日、一生懸命になって聴いてたバンドの名前。

あれ、本当に思い出せないや。

そんなもん。

それくらいでいいんだよって。

僕はその人から教えてもらったんだ。

あれ？

誰だったけなあ――？

自分を困らせたい

ただ僕は

迷子になりたかっただけ

みんなで

迷子になっちゃおうよ

ごうしようもないくらい

救いのない

煮え切らない

そんな、世界へ

ここが、その、入口

「敷き詰める」

水滴。混ざる。広がる。空間は、溶けて。時は、撫せて。透き通る。光みたいに。飛び立つ。解き放つ。解けない、魔法をかけて。浴びる。暖かな、ひだまりの中。差し込むのは午後の日差し。分かっているのに痛いフリ。分からないくせに知らんぷり。あなたが勝手に縁取った世界、何が見える？

「彼が二階から飛んだ理由」

ある日同じクラスの彼がベランダから飛び降りたのも  
今じゃ同窓会の笑い話で済んでいます

「坊ちゃんかっ！」って突っ込みが入る程許された話題になりました

でもずっと引っかかっていたことがあって

それは彼が飛び降りたのが

二階からだったってということ

だって本当に死ぬつもりだったらもっと高くから飛べばよかったのに  
なのに彼は二階から飛んだ

飛んで、落ちた

二階から

落ちて入院して退院してからの彼を虐める人はいなくなった  
彼は飛んで落ちて這い上がったんだ  
自力で

這い上がるために一度落ちることを選んだんだ  
あの日そんな選択をした彼も来月結婚するらしい  
その報告をするときの彼の笑顔を見たら

「飛んだ」話なんていうのも何だか笑えてくる

飛んで、落ちて、這い上がって

今じゃ笑ってる、彼

『宙ぶらりん』

あの娘は今日も一人で待ち焦がれてる  
空へと落ちていく景色を見ながら  
求めては消えていく感覚

焦燥

いつも待ち焦がれているのに

甘い、甘い

小説の一ページ目をめくって

聴こえてくる音があったなら

それに合わせて歌うあの娘が見えたなら

涙は海になって

小規模な宇宙なんてのも出来上がって

恋をすれば解決

なんちゃって

優しさなんて信用できたりできなかったり

変わってしまう風景

包み込まれて

いつの間にかニコニコ

影が見えるなら僕の方が悪い？

決めなくちゃいけないのかな？

笑い飛ばして

でも考えることはやめない

砕け散っていく、夢も現実も

染め上げられていく

一つの街が夕日に

一生消えないもの

くだらなくて

愛すべき馬鹿野郎

行きたい、生きたい、会いたくて

夢の中でみたんだ

ジャンプして月までタッチする夢

私は鉛筆を置いた

人混み、ざわつく音

あっ！そろそろ始まるよ！

「それじゃあ、昨日書き上げた新曲やります！」

「1、2、3……」

ギターの音がジャンジャンって鳴り響いて

フロアを埋め尽くした

「思ひ出」

汚れていないものなんていつかきっとなくしてしまうだろうけど

それでも今を薄めたいなんてこれっぽっちも思わなくて

それでも私は

それでもあなたは

もどかしくて

何も手に着かなくて

ごうしようもなくなったって

汚れてしまえばいいと

染みになればいいと思った

絶対に消えない染みに

あの海の見える丘に行きましよう  
潮風の匂いに太陽の光

青い空も青い海も

みんな、みんな包み込まれましよう

迷ったらあの丘に向かえばいい

足取り重く

毎日が重力で押しつぶされそうになった時  
それを思い出してください

全てが起こることを信じて

全てを海に流して

サカナのように泳げれば  
空だって簡単に泳いで

絵の具でオレンジ色に勝手に染めた手作りの空だって  
泳いでしまえば

それはそれで空なわけで

夏のガラガラしたのも好き

泳ぎ足りない

サカナならよかったのに

「ごうして？」

音を鳴らさなきゃ

声を発しなきゃ

頭を使わなくちゃ

次を考えなくちゃ

何かを願わなくちゃ

叶えなくちゃ

体を動かさなくちゃ

出来ることを見つけないきゃ

走り続けなきゃ

夜を越えなくちゃ

さよならかもしれないけど

出来るのにやらないよりかは

ずっと良いんじゃない？

遠い時間を数えて引き伸ばして  
本当はなかったものをでっちあげて  
花びらの枚数を数える  
街は霧がかかり  
待ちわびたあの日の再現も  
記憶は薄曇り  
当たり前前の毎日  
馬鹿みたいな会話  
嘘みたいな出来事  
もう全部ほごけてしまっただけで消えてしまえそう  
だから私はなかったものを数える

「確かめてみる」

雨降りのトンネルを潜り抜けた先に

何だか歪な「それ」が見えて

ロープで締め付けられたみたいいきゅーってなって

トゲが刺さったみたいにくく痛んで

どこにあるかも分からない気持ちで閉じ込めて

自分に何かを当てはめようとしたり

気分と自分に振り回されて

すり減って

溶けて

混ざる

「ラストダンスにのせて」

ラストダンスに向けてレコードの針を落とす  
流れ込むように  
溶け込むように  
旋律を奏でて踊り狂う  
骸骨達は肩を寄せ合って  
ケタケタと笑う  
哀しくて優しい涙が乾いて  
鯨の形をした噴水のある公園で大勢でぐるぐる回る  
噴水の水が空まで伸びて  
空は七色  
虹は塗りつぶされる

旧校舎の音楽室で壁にもたれながら  
煙草を吸ってギターを弾くのが私の日課  
いつも一人だったし教則本なんて読んだこともなかった  
自分が上達しているのかなんて分かりもしなかったけど  
壁とギターのひんやりと冷たい感覚に挟まれていることが  
少しやめられなかった

雨の匂いで包まれている空間  
死んだように眠る彼女の瞳に映る世界はもうパラレルしない  
霧は晴れて、切り離されて、めくるめく  
誰も教えてくれない現実が沢山転がっていて  
遠くに逃げたくなって

学校の屋上のジャンプ台にスタンバイした  
行くよっ♪

せーのっ♪せっ♪

「スカート」

スカートを短くするのが学校で流行っていた  
よくは覚えていないが私もそれに憧れていたんだと思う  
ハサミを使ってサクサクと切っていく

途中で指を切ってしまったけど

取り敢えず最後まで終わらせることにする

思いの外、スカートも私も傷は深かった

こんな傷、いらなかったよ

そう思った時には

スカートはただの切れ端にしか見えなかった

私はそれを使って傷を塞いだ

あとでお母さんにすごく怒られた

とぼとぼと歩く  
銀河鉄道駅前  
カナシミ商店街を抜けて  
鯨ヶ岡公園へ

月面のブランコで三六〇度回転なんて  
夢の話じゃない  
本当に出来ちゃう

ひらめいて、ときめいて  
形になって、繋いでいって

忘れられないように  
尽きないように

どこかの知らない誰かが  
何かを思いついて  
何かを発信してる

かけらを拾い集める  
ひとつひとつ

未完成な程に  
何かが起こりそうな  
そんな予感

今日もどこかで  
誰かが  
何かを作り上げて  
発信される

私はまた、とぼとぼと歩き始めることにする

表紙イラスト・ゆずさ (<http://twitter.com/yuz>)  
赤身レコーズ二〇二一



illustration by: yuzusa